「笹川杯作文コンクール 2011」～中国語で応募～ 第４回優秀賞作品

「フラットな視点で」

※アルファベット表記は、原文のままです。

北京市　周毅

よく知っている人と向き合った時、或いは人だかりの中でふと見知らぬ人に出会った時、あなたは相手をどのように見るのだろうか。仰ぎ見るのか、見下ろすのか、はたまたフラットに見るのか。時にはこうしたことも問題となる。

例えば数年前の話だが、アジアのＸ国から北京にやってきたばかりのＹさんに中国語を指導するよう友人から紹介された。私が過敏だったわけではないことをひたすら願うが一話をしている時、彼はずっと私の名刺をもてあそんでいて、もみくちゃにされた名刺は、しまいには一塊のごみになってしまったのである。話の間、彼は先生に対する敬意を見せておらず、また初対面の友達に対する礼儀も感じさせない態度だった。おおかた彼は自分の国が中国より発展しているとか、在籍している会社が割と有名だとか、自分の職位が高い方だとでも思っていたのだろうが、何れにしても、彼の語気や態度にはある種の優越感がにじみ出ていた。それは、一種の“見下ろす”角度であり、面と向かって座る人にとって実に不快なものであった。そのため、彼が毎週二回の指導をできるだけ早く開始することができないかと尋ねてきた時、私は丁寧にではあるが迷わず、申し訳ありませんが…と言った。

この件は、個人と個人との間で起きた、大勢に影響はない些細で小さな出来事に過ぎない。しかし、ある国の多くの人々が、他人や別のグループ、或いは他国の人々に対して、見下ろす、仰ぎ見る、ひいては敵視するという習慣を持っているとなると、問題であり、かなり深刻な話になってしまう。

最近の例では、３年も経たないうちに、中国で“5.12”汶川大地震、日本では“3.11”大地震が発生した。この二度に亘る極めて破壊力の大きい地震が発生した時、発生以降、中日両国政府と両国民の間には人間性が輝き感動を呼び起こす多くのドラマが見られた。だが、同時に起きた別の出来事が、筆者を含む多くの人々にとって心配の種となったのである。

私の仕事はインターネットと不可分の関係にあり、私が取得する情報の多くはネットから得られるものである。日本で“3.11”大地震が発生してから、中国国内のネットフォーラムで他人の不幸を喜ぶ書き込みをいくつか目にした。その言葉は恥ずかしいかしいかぎりであり、私はそれらを繰り返したくはない。

時間を３年前に戻すが、中国で“5.12”汶川大地震が発生した時、日本のネット上でも同じように他人の不幸を喜ぶ言論があったのだろうか。私は、日本語が分からず日本人の書き込みを読むことができないので、むやみに結論を出すことはできない。

そうした言論の陰には、一種の根深い敵意が含まれている。その敵意については、それが生じた歴史的原因や必然か偶然かを分析する能力など私にあると思わないが、それは間違いなく中国社会の主流をなす視点ではないとだけは言いたい。そこに現れているのは人間の弱みであり、醜い一面である。

“善意で人を助ける”、“徳をもって恨みに報いる”といった古い教えを説かず、ただ“相手の身になって考える”だけでも分かることである。誰の郷里で天災や人災が起きた時でも、その不幸を喜ばないで欲しい。彼らが蒙っている不幸は、自分が経験したものかもしれないし、これから自分が被らざるを得ないものかもしれないのだから。

ネット上やマスメディア上で、別の言論的現象も目にした。事実を顧みず、分析を加えることもなく、惜しみなく相手方を持ち上げて自国と自国民を蔑む言論が見られたのである。

日本で“3.11”大地震が発生した時、どれほど日本国民の素質が優れているのか、どれほど秩序が整っているのか、どれほど政府の対応が素早く役立ったのか、など褒めそやし始める人がいたのだ。福島原子力発電所の放射性物質漏出危機が日増しに高まっている時、“ヨード塩が放射線を防げる”などといったデマが広がったため、中国のいくつかの都市では食塩を買いあさる騒動が起きた。“塩の買いあさり”騒動はごく短期間だったものの、この件に便乗して持論を展開し、多くの偏った言論を発表する人もいた。こうした言論のテーマとなっていたのは、日本人と比べて中国人は素質が低いという思想である。

しかし、それは事実ではない。或いは、事実の一部しか論じていない。例えば買いだめにしても報道によると、地震発生後、遥か東京のスーパーでは食品が競って買い占められ、陳列棚が空になったということである。東京の水道水で放射性物質が見つかり、政府が「乳幼児には水道水を飲ませないように」と広報した時、人々は政府の公表データを半信半疑であった。被災地で“僅かばかりの水も求め難い”だけでなく、何百キロも離れた大阪などの“安全地帯”でさえ、市民が狂ったように瓶詰めの水を買いあさり、買いだめしたのだ。地震発生からわずか半年後の８月下旬、新米から放射性物質セシウムが発見された時、多くの日本人は古米を買い込んで主食にし始めるのではないだろうか。

筆者は、こうしたことを羅列して、日本人の素質の高低について説明したいわけではない。ここで伝えたいのは、突発的な事件に直面して、人がすぐ見せる反応は善悪で計れるものではないということ、一つや二つの偶発的事件を、一人の人間ないし一国の国民の素質を判断する十分条件とすることはできないということである。

上記のそれぞれは、何れも論者が観察にあるべきフラットな視点を欠いていたためのものである。むやみに尊大になると、相手を見下すのに慣れてしまう。むやみに自分を卑下すると、相手を仰ぎ見ることしかできなくなってしまう。人と人、国と国との交流には、何れもフラットな視点がもっとあるべきであり、見下す、仰ぎ見る、敵視するといった視点は少なくすべきなのである。

色眼鏡を通さず相手を見、同様に自分も色眼鏡を通さずに見るのである。日本を観察する角度を正せば、“塩の買いあさり”、“水の買いあさり”、“米の買い込み”といった事件が起きた時、「中国人の素質は、日本人ほど優れていない」などといういい加減な結論を出すことはあり得ない。同じ理屈で、中国を観察する角度を正せば、中国の国民総生産が日本を追い抜いた時の“中国脅威論”も日本で少しは静かになるだろう。